研究発表　分科会７　境界と接続 10 月 15 日（日）13：20-14：00　第一校舎 123

# 「詞」における時間と自己の表現
## ―― 『人間詞話』（1908）の概念「境界」を中心に

大阪公立大学　楊 冰

本論では、中国近代美学の創健者として知られる王国維が詞論『人間詞話』で論じた重要概念「境界」を考察する。彼が提唱した「境界」は中国の美学研究の核心的な概念となり、多くの重要な美学研究は「境界」から展開していった。「境界」 は『人間詞話』の最初に登場する「詞は境界を以て最上と爲す。境界有れば則ち自ら高格を成し、自ら名句有り。」 つまり「境界」は、詩ではなく詞の概念である。日本で広く知られている「漢詩」は主に中国の詩であって詞ではない。日本では代表的な詩人杜甫、白居易の名は広く知られているのに対して、代表的な詞人李煜は殆ど知られていない。

詩は五言、七言など、全篇の各句は同一の文字数であるが、詞は、各句の文字数は一定されず、文字数の異なる句が混在している。だが、両者の本質的な違いは、このような形式的なものだけにとどまらず、その性質にある。作詩は官僚を選抜する科挙に用いられる科目でもあるため、官僚を目指す文人たちにとって、詩を盛って自分の真実な感情を表すことより政治的な抱負や優れた思想、高尚的な感情などを表すことが最優先される。それに対して、詞は文人たちが華やかな女性たち（芸者）に囲まれる宴会という娯楽の場に誕生した歌の歌詞である。文人たちは気に入りの芸者に歌詞を作って差し上げることから、徐々に詩で表せない私的な感情を詞に自由に表せることに気づいた。五代から文学素養の高い宰相や皇帝など詞の創作に関わることによって、詞は徐々に娯楽の場から離れ、中国の文学の新たなジャンルに成長した。詩は作者の「公的な顔」の意図的な表現に例えれば、詞は作者の「私的な顔」の無意識的な露われだと言える。

「境界」の考察にあたって、この概念は詩と異なる性質を持つ詩の概念であることを念頭に置かなければいけない。『人間詞話』において王国維は数多くの詞作を挙げて「境界」を説明したが、それらの詞作と「境界」の関係性について論じる先行研究は見当たらない。本論は王国維の最も称賛している詞人李煜の詞作「虞美人」をはじめ、四首の」作に注目し、「境界」との関係性を探る。結論を先取って言えば、まず王国維の挙げた詞作はすべて詞人が春という季節に創作した点に共通している。花が満開から凋零へという春の自然現象は、時間の推移とそれにもたらされる命のあるものの消滅が、鮮明に感じられる季節である。詞人は繰り返される春ではなく今一度の春、つまり循環的ではなく経過的時間を描き出し、現在から過去へそしてまた現在へ、「過去の自分」と「いまの自分」の同一性を見つけようとする。しかし、「過去の自分」は幻のように消え去って、生きている今という瞬間の感覚、たとえそれは骨に染みる苦痛であっても、ただ一つの実感として得られる。「境界」は今という瞬間に生きている真実な感覚である。